

熊本県 I P M実践指標【促成トマト】

時期	管理項目	管理ポイント	
育苗圃、本圃準備	ほ場及びその周辺の管理	ハウス内及びハウス周辺の除草により害虫の発生を防ぐ。	
		防虫ネット等物理的防除資材を早めに設置して害虫の侵入、定着を防止する。 発生が考えられる土壌病害虫に応じて適切な土壌消毒（太陽熱、熱水、蒸気、土壌還元、土壌くん蒸等）を実施する。	
育苗期	適正な品種の選定	発生が考えられる土壌病害に応じた適切な抵抗性台木を使用する。 発生が考えられる主要病害に応じた病害抵抗性品種（穂木）を使用する。	
	購入苗からの健全苗の選別	購入時及び2次育苗期間を通して観察を行い、健全苗を選別する。	
	健全苗の育成	無病床土を用いて育苗を実施する。 病害虫による被害苗が見つかったら、直ちに除去する。	
		防虫ネット、近紫外線除去フィルム等を利用して害虫の育苗ハウス内への侵入を防止する。 定植2～3日前にジノテフランまたはニテンピラム粒剤を処理し、定植作業時や定植後に飛来するタバココナジラミを防除する。 病害虫の発生が認められたら、適切な薬剤散布を行い防除する。	
定植、収穫時期	定植作業	健全苗を選抜し、耕種基準に準じた適切な栽植密度で定植する。 害虫の寄生を防ぐため、苗の運搬時には、トラックの荷台に防虫ネットや幌を被せ、定植はハウスのドアを閉めて行う。	
	雑草対策	プラスチックマルチ被覆により雑草の発生を防止する。	
	防除要否の判断	トラップ等を利用して病害虫の発生状況を把握する。 ほ場の観察により病害虫の早期発見に努める。	
	コナジラミ類媒介ウイルス病対策	野良生えトマトなど感染源となる植物を除去する。 目合い0.4 mmの防虫ネット展張により、タバココナジラミのハウス内侵入を抑制する。 黄色粘着テープや光反射シート等を利用した物理的防除を行う。 発病株を認めたら、早期に抜き取り、適切に処分する。 県内の促成トマトで発生しているタバココナジラミは、バイオタイプQが主体である。本種に効果が認められる農薬を選択する。	
		コナジラミ類媒介ウイルス病対策	野外からハウス内へのタバココナジラミの侵入がなくなる11月に、殺成虫効果の高いピリダベンまたはピリフルキナゾン水和剤を散布する。 トマト黄化葉巻病抵抗性品種でも感受性品種と同様の防除対策を実施する。
		病害対策	適切な摘葉等を行い、通風採光を図る。 被害葉や被害果実は直ちに除去、処分する。 吸湿性フィルムを内張りに用いて、ハウス内湿度の低下を図る。 暖房機や循環扇を利用し、ハウス内湿度の低下を図る。 生物農薬（微生物製剤）を利用した防除を実施する。
	虫害対策	黄色防蛾灯等を利用して鱗翅目害虫の侵入を抑制する。 被害果実の摘果や害虫の捕殺による防除を実施する。 土着天敵に影響の少ない選択性薬剤を利用した防除を実施する。 生物農薬（BT剤、フェロモン等）を利用した防除を実施する。	
	農薬の使用全般	十分な薬効が得られる範囲で最小の使用量となる最適な散布方法を検討した上で使用量・散布方法を決定する。 対象病害虫・雑草に効果のある複数の農薬がある場合には、飛散しにくい剤型を選択する。	
		農薬を散布する場合には、適切な飛散防止措置を講じた上で使用する。 農薬を使用する場合には、同一系統の農薬を連用しない。さらに、当該地域で薬剤抵抗性の発達が確認されている農薬は当該地域では使用しない。	

時期	管理項目	管理ポイント
栽培終了時期	コナジラミ類媒介ウイルス病対策	株の切断と密閉処理によりウイルス感染株の枯死と媒介虫の死滅を確認し、片づけを行う。なお、悪天候等で作物の枯死に時間がかかると予想される場合には、古株枯死に使用できる薬剤の併用も検討する。
全般	病虫害発生予察情報の確認	病虫害防除所が発表する発生予察情報を入手し、確認する。
	コナジラミ類媒介ウイルス病	地域で決められた定植及び栽培終了時期を守る。
	作業日誌	各農作業の実施日、病虫害・雑草の発生状況、農薬を使用した場合の農薬の名称、使用時期、使用量、散布方法等の I P M に係わる栽培管理状況を作業日誌として別途記録する。
	研修会等への参加	県や農業協同組合が開催する I P M 研修会等に参加する。